



就任に当たって

支所長 今村 浩人

マレーシアのサラワク州における1年半の滞在中に調査した多くの木材加工工場では、製品の大半が日本向けであり、改めて我が国の木材消費量の大きいことに驚いた。サラワク州はマレーシアの中で丸太を輸出している唯一の州であるが、製材をはじめ加工品を製造する場合は木材伐採のロイヤリティを大幅に削減するという優遇策をとっており、現実に製材品の輸出も増加している。他の国からも大量の木材及び木材製品が輸出されていることを考えると、日頃から数字で理解していた我が国の外材消費量がいかに大きいかを実感した次第である。

このような例をあげるまでもなく国産材を取り巻く経済状態は芳しくない。この事態を改善するため、政策と研究の両面からの検討が日夜なされているところであり、研究面では今のところ急速に経済効果を上げるような成果は得られていないものの、各試験研究機関が連携して問題点を絞り、徐々に成果を出しつつある印象を受けている。

研究の成果は出るのが遅いうえ、また人目に付きにくいこともあって、研究と実業が遊離し

ているとの意見があるが、必ずしもすべてがそうではないと思う。林産研究の場合に限って見れば、企業は公表された研究成果を結構利用しているように思える。課題の設定が重要であることは勿論であるが、たとえ小さくとも確かな成果を公表しておくことが重要である。

研究の進め方については林業も林産も共通した部分が多いであろう。現役の研究生活を終えて振り返って見ると、自分がなした確実な成果がいかに少ないかを感じている。勿論われわれには成果を急ぐ研究もあり、マイペースで研究することは容易ではないが、これはと思う課題は確実にものにすることが大切ではないだろうか。さらにこれはむしろ個人的な希望ともいえるが、その人らしい個性が出ている発想や手法がうかがえれば、なおすばらしいと思う。

我が国では、木材を伐採する以前に森林を育てなければならない。健全な九州の森を育てあげることが資源としての蓄積につながる。九州支所の研究が豊かな森林の支えとなることを願ってやまない。

森林組合における選木精算処理システムの構築

経営研究室 近藤 洋史

1. はじめに

これまで熊本県球磨村森林組合の選木精算処理には以下のような問題が存在していました。

①素材が製材工場に入荷してから精算書が発行されるまでに1カ月以上もの日数を必要とし、素材出荷者からの精算要求に対応できていなかった。②選木処理は選木機のコンピュータにより1日約1000本以上処理されるにもかかわらず、精算処理が手作業であったため、精算業務担当者の業務量は膨大なものとなっていた。③統一された原票・伝票の形式が存在しないため、書類の管理が煩雑となっていた。④選木された素材の樹種別・径級別本数といった情報の集約が行われていないので、素材の受入状況がだれにも把握できていなかった。

そこでこれらの懸案を解決することを目的として、コンピュータを使用したシステムの構築ならびに導入を行いました。

2. システムの設計

素材は1出荷者ごとに区分してトラック等を用いて選木場に集荷されていました。2出荷者以上の混載で集荷した場合でも、個々の出荷者の素材がそれぞれ区分できるようにワイヤロープ等でまとめられていました。そして、この1出荷者ごとに、選木機を用いた選木から精算書の発行までの処理を行っていることが明らかになりました。そこで、この1出荷者ごとの素材を1単位としてコンピュータ処理を行うことにしました。

市況の原木単価や素材伐出にかかる経費などは森林組合事務所でしか把握できません。そこで、精算書等の発行は、従来通り、森林組合事務室で行うこととし、システムを構築しました。本システムの機器構成を図-1に示します。

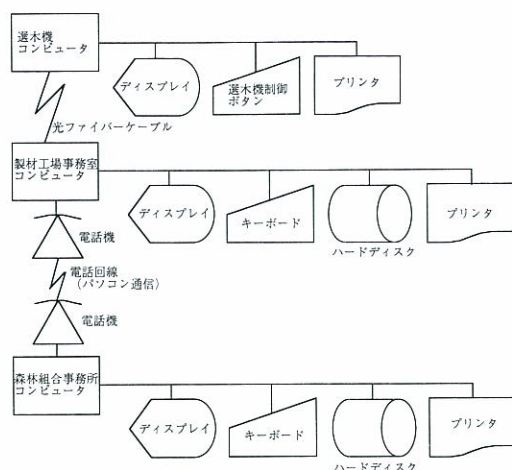


図-1 機器構成

球磨村は球磨川上流部の山間地に位置しています。そのため、森林組合事務所や製材工場など森林組合施設を1個所に集めることは地理的に不可能です。そこで、約1 kmほど離れている製材工場事務室と森林組合事務所との間で、選木情報の伝達にパソコン通信という方法を使用することで地理的問題を解決しました。パソコン通信とは、コンピュータを用い、電話回線などの公衆回線を介して情報の通信を行うものです。このパソコン通信を用いることで迅速かつ正確に選木情報を製材工場事務室から森林組合事務所に送信することが可能となりました。

3. システム導入後の選木精算処理

システム導入後の処理の概略を図-2に示しました。本システムでは、選木機を用いた選木処理から精算書発行に至る部分にコンピュータ処理を導入しました。

選木機を制御するコンピュータに一時的に蓄積された選木情報を製材工場事務室に設置したパソコンに光ケーブルを使用して送信します。

製材工場事務室では、まず、この選木情報を

パソコン通信を用いることで情報の正確で迅速な交換が可能となり、情報の有効利用・業務の効率化を図ることができました。本システムを導入することで、前述した目的が達成された



今後、素材単価等の情報が蓄積されるにつれて、樹種・径級・長級ごとの素材単価の時系列推移が森林組合事務所で視覚的に把握できるようになり、市況の価格動向の解析により、いっそう戦略的な林産加工販売事業が推進できるようになると思われます。さらに、このような林産販売事業をすすめて行くには、森林組管内の森林資源の把握や森林施業計画編成等も重要な要因と思われますが、これらの分野もシステム化を図る必要があります。

害虫シリーズ (10)

オオゾウムシ

オオゾウムシはオサゾウムシ科に属する、その名の通り大きなゾウムシ(成虫の体長1~3cm)です。マツ林などに極めて普通に見られる虫で、幼虫は各種の広葉樹、針葉樹の枯死木を餌にしています。特に切り株が好きで、春から夏にかけてこの虫の幼虫が作る独特の黄色っぽい木屑(フラスといいます)が松くい虫にやられたマツの切り株から吹き出しているのをよく見かけます。このフラスの出所を探って行くと、直径5mmにもなる大きな孔の中から頭の割には胴の短い奇妙な形をした幼虫が現れます(写真-1)。

この虫は材に大孔をあけてしまうため、貯木場などに発生した場合には丸太に大きな被害をもたらします。1991年の台風被害の後、大分県などで風倒木への本種の加害が報告され、大発生の可能性もあるということで、この虫は目立たない普通の虫から一躍大害虫としてクローズアップされることになりました。ところが、いざ防除を考える段階になって、我々はこの虫の

生態が実はほとんどわかっていないという事実につきあたりました。幸い虫の発生量はその後収束に向かい、結局オオゾウムシは大害虫にはなりませんでしたが、この潜在的な大害虫の生活史は当研究室の調査により徐々に明らかになりつつあります。

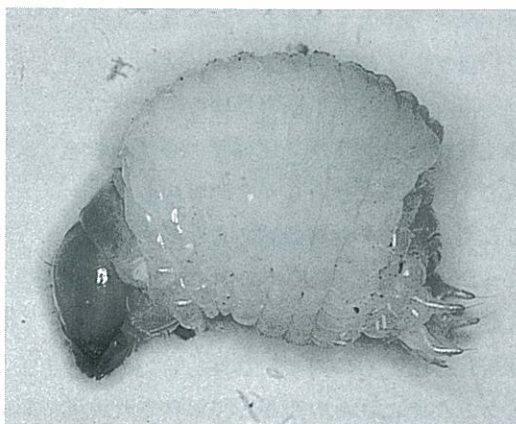


写真-1 : オオゾウムシの幼虫 (体長約1.5cm)

(昆虫研究室 中村(真鳥)克典)

連絡調整室から

- 1) 九州地区林試協臨時場所長会議が2月15日に厚生年金会館で開催され、木材の人工乾燥問題について討議されました。
- 2) 秋季場所長会議で要望のありました「LAN講習会」が2月15日に九州支所大会議室で開催されました。この際に使用した資料をもとにリーフレット「ネットワークの概要」を作成しました。
- 3) 九州地区林試協林業機械分科会が3月7~8日に水前寺共済会館で開催され、高性能林業機械の活用について討議されました。
- 4) 4月18日には情報活動システム化事業「風台風の影響による二次性森林被害調査」(6~8年度)が、4月25日には地域重要新技術開発「風害発生危険地域の判定及び風害に抵抗力のある森林施業手法の解明」(7~9年度)の推進会議が九州支所大会議室で開催され、研究の進捗状況と今年度の計画が討議されました。

- 5) 平成8年度九州地区研究担当者会議及び九州支所研究発表会は、9月4日~6日に熊本厚生年金会館で開催される予定です。
- 6) 「九州の森と林業」がインターネット上で読めるようになりました。
URL = <http://fkuma.ffpri-kys.affrc.go.jp/>

九州の森と林業	No.36	平成8年6月1日
編集	農林水産省	林野庁
	森林総合研究所九州支所	
	熊本市黒髪4丁目11番16号	
TEL	(096)343-3168	
FAX	(096)344-5054	